

---

# 四季島の扉 ~ THE Gate of SAGA ~

紅工房

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

四季島の扉 THE Gate of SAGA

### 【Nコード】

N5971X

### 【作者名】

紅工房

### 【あらすじ】

それは、一人の少年の些細な青春。

それは、一人の少年のありふれた恋心。

それは、一人の少年の壮大な冒険譚。

それは、壊れた少年の彩られた成長の物語。

四季島と呼ばれる人工島。小さな島にはある秘密が隠されていた。

主人公、春日井朱夜<sup>かすがいあかや</sup>は退院を機に恩人の好意を受けて、四季島に転居してくる。

それが、再び運命の歯車を回すきっかけで。それが、彼を待ち受ける困難と甘い日々の始まりで。それが、彼を治していく物語の始まりだった。

## Prolog .

痛みが全身を駆け巡る。

傷みが脳を刺激する。

いたみが体を蝕んでいく。

暗い。闇くろい。くらい。

重い。おもい。オモイ。

目から何かが止まらない。

出るなと叫ぼうとしたけど声が出ない。

流で出るなと手で塞ふごうとしたけど動かない。

痛い。痛い。痛い。

辛い。辛い。辛い。

それは、悪夢の様な時間で。

それは、最悪な記憶の底にあり。

それは多分、生きてきて最低な日の始まりで。

それはきつと、生きてきて最高に愉快な日だった。

暴れ、狂い、流れ、刺激し、蝕み、突き刺さり、抉り、穿ち、動けず、されるまま、眠ることも許されず、起きることも赦されず、死ぬことも許容されず、生きること拒絶され、ただ惰性で呼吸し、ただ本能的に心臓が鐘を打ち、ただ脳が働き、ただ体は固まり、傀儡の様になだれ、ただ誰かが来るのを待つ。

死は隣人で、生は自分で、魂はそこにあり、死神は笑い、神は見放し、天使は見守り、悪魔は立ち呆け、人間だけが忙しく動く。

気配はあった。足音も聞こえた。声がする。ただ、何を言っているのかわからない。

明かりが差した。冷たい何かが頬に落ちた。抱え上げられた。その人は、笑っていた。

「生きてる……！生きてるぞ！！この子はまだ、生きてる！！」

どうやら僕は助かったらしい。

助かったと言っても、一体何から助かった？わからない。わからないけど、僕は多分、助かった。

死から？それとも生から？いや、あの暗闇からかもしれない。

「酷い怪我だ。すぐに救急車で病院に搬送をしてくれ！！」

視界が霞往く中で、その人は誰かにそう叫んでから僕をギュッと抱き締めた。

痛みは何時しか消えていて、僕はその温かさに呆然として……。

「ああ……ああ……あああああああああ……あつ！……！」

『産声』を、上げた。

太陽が燦々と輝き晴れ渡る空。地平線の向こうまで伸びる青く穏やかな海。澄み切った空気と心地良い風。

でも、僕の心はそんな環境とは真逆に曇り空で水溜まりの状態で、薄汚れた空気と冷たい隙間風が吹いている。

ひと月に何回かしかないフェリーから重い足取りで降りると、出迎えて来たのは田舎臭さの漂う港と、そこから見える似つかわしくない洒落た商店街。

僕は俯きながら簡単な荷物が入っているキャリーケースを引き、この島の見取り図……つまり地図が貼り出されている古臭い案内掲示板の前へと移動した。

掲示板は海鳥の糞に汚され、潮風に曝されてだいぶ傷んでいるが、画鋏で貼り付けられた地図は真新しかった。

どうやら最近新しく貼り替えた様で、紙がピンとしている。

(四季島……。来ちゃったんだよなあ)

内心で、どうしてこんな所に来てしまったのだろうと溜め息を吐く。

とはいえ、だからと言って都会の高校に通う気はさらさら無かつたし、選択肢など初めから無かつた訳で。こんな僕がここに居る理由は、居辛い都会から離れる為な訳で。

(今更嘆いたって、何にもならないか)

嘆息を吐く。潮風に乗った海猫が鳴き、そのまま空へと羽ばたいて行く。

「おーい！ おーい！」

海猫の姿を目線で追っていると、女の子が誰かを呼んでいるのか手を振っていた。

活発そうな印象の美少女だった。いや、美少女っていうのは言い過ぎかもしれないけど、僕の主観ではそう判断する。

ショートカットの髪に、赤と黒のチェック柄のベストを青い長袖の上に羽織った、白い短パンと白とピンクのボーダー柄のニーソックスといった一般的にボーイッシュな格好をしている美少女。

(って、僕は何を知らない女の子の服装をマジマジと見ながら観察しているんだ。まるで変態じゃないか)

そう思っつて、僕はぷいっつと目を逸らす。顔が熱い。日に当たり過ぎたせいだろうか。

「おーいって！ 聞いてるのかい？ 少年！」

「うおあつ！？」

突然、不意に、さっきの美少女が僕の前に現れ、声を掛けて来たモノだから思わず叫び、体勢を崩してしまふ。

最悪。女の子の前で素っ頓狂な声を上げたばかりか、転けて尻餅打つなんて、最悪以外のなんでもない。

鬱だ……。四季島に着いて早々こんなに恥ずかしい真似をするなんて。死にたい。

「あや、驚かせちゃった？」

「だ、大丈夫……です。ぼぼ、僕が勝手に転けただけ、ですから……」

…」

キョトンとする少女に、吃くもりながらそう言って立ち上がり、腰や尻に着いた汚れを両手で叩いて払う。

「いやー、いきなり声を掛けたのは謝るよ。ごめんね。あ、でも警戒しないで。別にナンパしようっていうわけじゃないからさ」

「は、はあ……」

ペラペラと流暢に、早口言葉の如く言いながら表情を変える少女に僕は空返事をして返す。

何だろつ。見覚えのある顔なんだけど、思い出せない。どこかで会った様な無いような……。

「ところで、君。もしかして名前……春日井朱夜かすがいあかやっていわない？」

「えっ……。な、なんでそれを？」

突然知らない人から名前を当てられて、僕は動揺した。

どうしてこの人は僕を知っているんだ？僕は知らない。そもそも、僕に女の子の知り合いなんていない筈だ。だって、ずっと、都内の大学病院に居たんだから。

「あつれ、おかしいな。覚えてないの？それはショックだなあ。

……じゃあヒント！キミはずっと病院に入院していました！」

「そ、それはヒントなのか……？」

「……うん、違うね。私もそう思う」

自分で言っておきながら、自分で否定して落ち込む少女。

えっと、あれ？ このやり取りに既視感があるのは何故だろうか。

「じゃあ、今度こそヒント！ 私達は何回かだけ、病院で会った事があります！その時私達は十歳でした！」

十歳……。あの頃の記憶って、嫌なことばかりであまり思い出したくないんだよなあ。いやいや、でも彼女は十歳の時に僕と会ってるって言うしなあ。

「……か、看護婦さんの妹さん？」

「ブブブー。大外れ。っていうか、そんな人がこの四季島に居て、キミを迎えに来るわけないじゃん。そんなキミに私はブンブンです」

「で、ですよねえ……」

当てずっぽうに言ったら、拗ねられて怒られた。

……可愛いと思ったのは内緒にしておく。

しかし、その表情は妙に引つかかる。何か、大事な事を忘れてしまっている様な、心に引つ掛かっている様な。

「それじゃあ最後のヒント！ ……私のパパは、あなたの命の恩人です」

あ。

「思い出した！ 一条さんの娘の水輝か！」

「だいせいかい！」

「わぶっ！？」

思い出してその名前を叫べば、水輝はいきなり抱き付いて来て僕の体をキュツとしめる。

唐突な行動に僕は体を硬直させ、そのまま何とか押し倒されない様に踏ん張り、思考を停止させた。

体が熱い。心臓が早鐘を打つ。それがうるさく響いて、鬱陶しい。

「久しぶりだね、朱夜。また会えて嬉しい。……退院、おめでとう」

「う、うん……。ありがとう」

僕の胸に顔を押し当てていた水輝はそのまま上を向き、朗らかに無垢な笑顔でそう言ってくれた。

僕はそれがこそばゆくて、恥ずかしくて、嬉しくて、色んな感情が渦巻いて、ポリポリと右手の指先で頬をかく。

「だけど、ひどくない？ 恩人の娘を忘れるなんて」

「しょ、しょうがないだろ！ あの時の僕は……」

「わかってるよ。言ってみただけ。……思い出してくれたから、チヤラにしてあげる」

今度は可憐な微笑み。……乙女か。

って、ふざけてる場合じゃない。何時まで抱き付いているつもりだ彼女は。は、腹に何か柔らかいモノが当たって色々と拙い気がするんだけど！

「み、水輝……。たたた、頼む。恥ずかしいから、そろそろ……」

「あ。ごめん。……つい、嬉しくてさ」

何とか吃りつつも告げる事に成功し、水輝も恥ずかしくなったのか頬をほんのりと赤く染めて照れ笑いをする。

なんつーか、こう。本当に女の子になったなあ。いや、仲良くしてくれたけど、数日しか会ってないからそうというのは失礼かも。

「嫌、だったかな……」

「い、いい嫌なわけない！ 逆だよ！ その逆！ ……ぼ、僕だって嬉しいに決まってるよ……」

僕は忘れてたけど、水輝は覚えていてくれた。友達がいなかった僕と初めて友達になってくれた彼女が、迎えに来てくれた。こんなに嬉しいことはない。

「良かった！ ……じゃあ、このまま立ち話も何だし、行こっ？ 向こうでパパが待ってるし！」

「一条さんが？」

「うんっ！」

満面の笑みで僕の右手を取り、水輝は引つ張り歩き始める。

四季島に来るまでに感じていた憂鬱はいつの間にか霧散していて、それはきつと彼女のおかげで。僕は倒れない様にするのに必死になって。左手で荷物を入れてあるキャリーケースを引いて。

そして、握られている手をそつと握り返して。僕は水輝と一緒に、一条さんが待っている場所へと向かった。

「久しぶりだね、朱夜くん。退院おめでとつ」

「お久しぶりです。一条さん」

水輝に連れられて港を出た後、商店街入口前にある道路に停められた白いワゴン車に寄りかかっている一条さんを見付け、互いに挨拶する。

麦藁帽子にサングラス。なのに服装はヨレヨレのグレースーツという一見不釣り合いな格好。顎髭を蓄えているのか、顎先以外はちゃんと髭を剃っていて、麦藁帽子から垂れる短い髪の毛先は全体的に跳ねていた。

「相変わらず、おかしな格好ですね……」

「おいおい、それが命の恩人様に対する言い草かい？ ……それを言ったら、朱夜くんだって相変わらず細いねえ。それに肌も真っ白これから食べて運動しないと」

余計なお世話だし、しょうがないじゃないか。細いのは最近まで入院していて味気ない病院食ばっか食べてたからだよ。それと僕は、日焼けが嫌いだ。

「もう！ パパ！？ 朱夜をからかう暇があるなら朱夜のキャリーケース車に乗せてよ！」

「はいはい。……ところで朱夜くん。遅かったのは水輝とイチヤイ  
チャしてたからかい？」

「はいどーん」

真面目でキリツとした表情で父親としてどうなんだよって質問を  
して来た一条さんをドロップキックでコンクリートにぶっ飛ばした  
のは娘の水輝だった。

額には青筋が浮かばせ、着地すると仁王立ち。歩道と接吻ベーゼを交わ  
している父を彼女は見ている。

「おいおい、酷いじゃないか水輝。実の親を足蹴にするなんて」

「パパが余計な事を詮索するからでしょ？ もう、キャリーケース  
は私が乗せておいたから、パパと朱夜も早く車に乗った乗った」

平然と立ち上がり、蹴り飛ばされた衝撃で外れたのだろう麦藁  
帽子とサングラスを拾いつつ喋る一条さんに、水輝が呆れた口調で  
返して早く乗れと催促する。

一条さんは短く返事すると、何のダメージもないのか歩道から車  
道に足を進めてワゴン車の運転席に乗り込んだ。

コンクリートに体を打ちつけたはずなのに大丈夫なのか、ある意  
味凄いなこの人は。

「何してるの？ 朱夜も早く乗りなって」

「あ、うん」

さっきの光景が衝撃的すぎて呆然と立ち尽くしていた僕に、開け  
っ放しのスライド式のドアから身を乗り出した水輝がまた催促する。

僕はそれに頷き、ワゴン車に乗るとドアを閉めてシートベルトを着けた。

運転席には一条さん、体一つ分空けて反対側の窓際に座る水輝、そして僕を乗せたワゴン車がエンジンを起動させて走り出す。

「改めてよろこそ、四季島へ。どうだい、都会と比べて」

運転している一条さんが、バックミラー越しに僕を横目で確認しながら尋ねてくる。

「まだ着いて間もないのに、いきなり感想を言えるわけないじゃないですか」

「はははっ、確かにそうだね。……でも、少しくらい思った事はあるんじゃないかな。空気に海に、空に港。都会とは全然違うからね、この島は」

嘆息を漏らす僕の答えに、一条さんは笑いながらそう語る。

確かに、都会を比較に出すのならこの島の空気や建物、風景は全く違うものだ。きれいな空と海、空気も汚れてないし港なんてフェリーに乗るために訪れた都会のそれなんかよりも違いがあった。

でも、感想として述べるにはちょっと足りないかな。

「……僕はこの島に研究者として来ているわけだけど、良い島だと思ってる。まあ、元は人工なんだけどね」

そう言って、一条さんは運転に集中し始めたのか口を開かなくなつた。

四季島は、人工島だ。

この島は世界を代表するとある財閥が長い時間を掛けて造り上げ、

日本政府と協力して打ち上げた先進的な技術の塊なのである。

で、そんな近未来的なこの四季島には多くの人が移住して、来て今の様な町になっている。

商店街が出来て、小中高一貫の学園が有り、レジャー施設も多く、なんというか、軽い地方都市クラスの島なのだ。ここは。

ちなみに、僕がこの四季島に来た理由はこの島にある学園 四季島学園の高等部に転入する為である。

退院後に通う学校に悩んでいた僕だったのだが、一条さんに推されて四季島学園に転入を決めた。

試験はテレビ電話による面接だけ、というものだったが一条さんの推薦が原因らしい。

四季島学園は、卒業後研究所に就職する生徒が多いと聞いていたけど、一条さんは研究所の偉い人なのだろうか。

ほとほと気になることではあるけど、以前から一条さんから研究について聞いても無駄、というのはわかってるから気にしても仕方ない。

例え聞けたとして、僕が理解出来る物じゃないだろうしそういうのは時間の無駄、というやつだろう。

一条さんは何かの研究者で、僕の命の恩人で、僕の精神を救ってくれた人で、僕を助けてくれる足長おじさんみたいな人。そんな関係で、丁度良いのだ。

「そつえば、しばらく朱夜はウチに泊まるらしいけど」

「えっ？」

「えっ、てもしかして聞いてなかった？」

水輝の言葉に驚きながら、知らないと首を縦に振りながら答える。

「パパ、ちゃんと朱夜に連絡してって言ったのに！」

「いや、悪い悪い。僕も忙しかったからね。すっかり忘れてたよ。ごめんごめん」

反省の色も無く、水輝の睨みつける視線をどこ吹く風と軽快に笑い声を上げて一条さんは運転を続ける。

彼女はそんな父親に何をしても、何を言っても無駄だと悟ったのかすぐに溜息を吐いて僕に向かい手を合わせながら頭を下げて来た。

「ゴメン！　パパがいい加減で！」

謝りの言葉が飛んでくる。一条さんがその内容に「酷いなー」と不満を述べる。そんな彼を娘は睨み付けて黙殺する。力関係が目に見えた気がした。

「いや、大丈夫だよ。でも、どうして僕は一条さんトコに泊まることになったの？」

「それはね、ちょっと前に四季島で地震があつてさ。学生寮の一部が壊れちゃったんだ。あ、怪我人は出なかつたんだけど、そのこわれた一部がちょうど朱夜が入る筈だった部屋で……」

成る程、それでね。

一条さんトコに泊まらせてくれる、っていうのは彼等の好意なのだろう。なら、それを断わる理由が僕にはない。

「だけど、良いの？　僕なんか家に泊めてもらって」

「何を言って」

「なに馬鹿なこと言ってるのよ！ 良くに決まってるじゃない！」

「ああ僕のセリフが……」

一条さんの言葉を遮り、水輝は力強くそう言ってくれてジッと僕の瞳を覗き込んでくる。

僕は思わずキョトンとして、その後思わず笑ってしまった。

「あはは、ありがとう水輝。そこまで言われちゃったら、断わるなんて失礼だしね。それに、もう決まってることなんでしょ？」

「うん。朱夜の部屋も用意してあるし、私だって楽しみにしてたんだから」

楽しみにしてた、か。なんだか、僕はずっと忘れてたのに彼女はちゃんと覚えていてくれたのが申し訳ないなあ。

いや、でもこれから挽回するチャンスはまだまだあるんだし、頑張れば良いのかな。

「一条さん、水輝」

唐突に、僕は二人を交互に見ながら名前をつむぐ。

そして、ゆっくりと深呼吸をしてから口を紡ぎ、同時に頭を下げた。

「これから、よろしくお願いします！」

「よろしくね！ 朱夜！」

「うん、よろしく頼むよ」

四季島に来て、最初はあるなに憂うつだったのに何時の間にかそれが水輝のおかげか霧散して、今では二人のおかげでこれからが楽しみで仕方なかった。

四季島で始まる新しい生活、新しい高校、新しい環境、新しい町。不安がないわけじゃない。だけど、きっと、水輝が居れば毎日が楽しくなるような気がして、僕は内心ウキウキが止まらなかった。

それが、あんなことの始まる前だなんて僕は知らなかったし、知る由も無かった。だからこそ僕は、毎日が楽しみで胸いっぱいだった。

そう、あの日が来るまでは。

人生という名の冒険はつづく。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5971x/>

---

四季島の扉 ~ THE Gate of SAGA ~

2011年10月21日02時02分発行